



東南アジア

1 農畜産業の概況

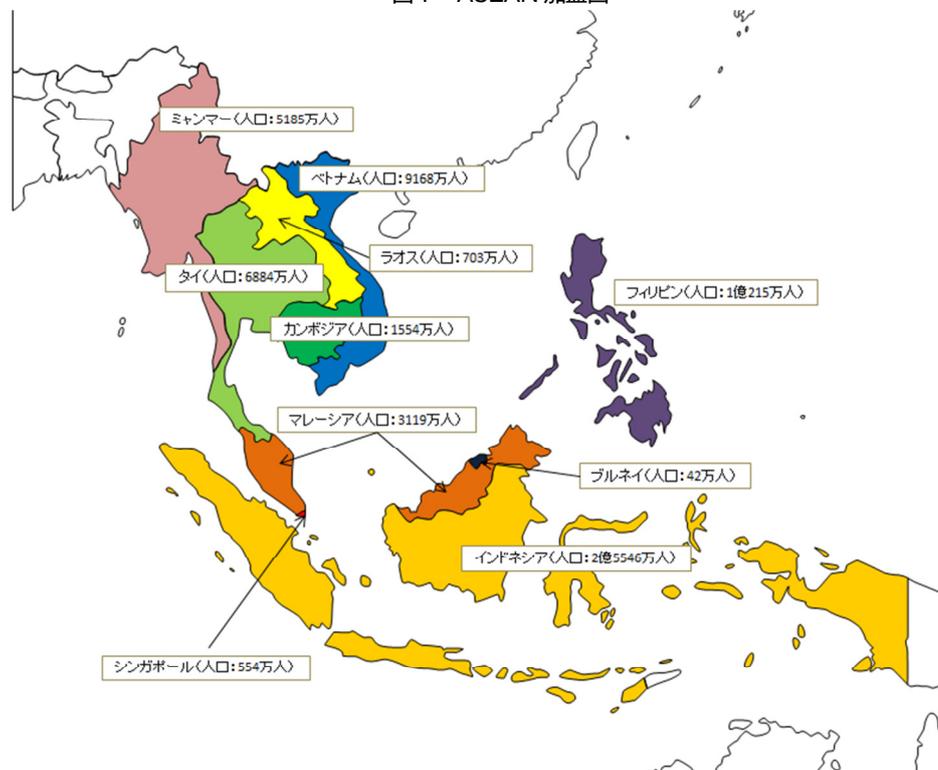
アジア開発銀行によると、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟 10 カ国（図1）のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が1%以下と低い一方、経済成長の著しいマレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナムの5カ国（以下「主要5カ国」という）は、9~19%（2015年）となっている。

主要5カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になっている中で、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、米などの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の産出額が増加しないという特徴も有している。上記以外の残り3カ国は、カンボジアが28.2%（2015年）、ミヤ

ンマーが26.7%（同年）、ラオスが24.8%（2014年）と高くなっている。これらの3カ国は、政情不安が長引いたことなどから農業以外の産業の発展が遅れており、相対的に農業の比重が高い。しかし、政情の安定化に伴う経済の発展により、その割合は低下してきている。

国別には、マレーシアは、油ヤシ、天然ゴムなど永年性作物の栽培が盛んな一方、フィリピンは、トウモロコシ、米などの穀物が中心となっているという特徴がある。畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、品目ごとの生産量には大きな差がある。

図1 ASEAN加盟国



資料：国際通貨基金（IMF）「World Economic Outlook Database」

注：数値は2015年。

ASEAN 各国の主要穀物および畜産物の生産量を見ると、米が多い。また、主要な畜産物は、豚肉および鶏肉であるが、宗教上の理由から豚肉を消費しないイスラム教徒の人口が多いインドネシアやマレーシアな

どでは鶏肉が多く、宗教上の制約のないベトナムやフィリピンでは豚肉が多い（表1）。

表1 ASEANの主要穀物および畜産物の生産量（シンガポール、ブルネイを除く）

（単位：千トン）

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2010	2,465	48	32	234	1,140	601	76
	2011	2,576	60	30	231	1,174	635	80
	2012	2,599	84	30	233	1,210	657	84
	2013	2,604	86	30	217	1,298	684	83
	2014	2,645	59	31	218	1,416	728	84
タイ	2010	34,409	5,124	223	895	1,220	980	911
	2011	36,128	5,266	207	880	1,243	996	982
	2012	38,000	4,948	210	949	1,319	1,054	1,022
	2013	36,762	4,876	196	967	1,611	697	1,095
	2014	32,620	4,805	192	949	1,757	732	1,067
インドネシア	2010	66,469	18,786	472	695	1,540	1,382	1,313
	2011	65,757	18,084	521	721	1,665	1,284	1,379
	2012	69,056	19,387	546	729	1,734	1,416	1,365
	2013	71,280	18,512	586	743	1,838	1,224	1,388
	2014	70,846	19,008	533	759	1,939	1,429	1,207
フィリピン	2010	15,772	6,377	300	1,636	869	424	16
	2011	16,684	6,971	301	1,642	920	441	16
	2012	18,032	7,407	295	1,653	985	461	18
	2013	18,439	7,377	297	1,681	1,087	428	20
	2014	18,968	7,771	301	1,691	1,115	416	20
ベトナム	2010	40,006	4,607	384	3,036	457	321	339
	2011	42,398	4,836	387	3,099	494	345	377
	2012	43,738	4,973	390	3,160	526	365	414
	2013	44,040	5,191	379	3,229	576	378	487
	2014	44,974	5,203	387	3,331	633	385	582
ラオス	2010	3,071	1,021	45	59	20	15	7
	2011	3,066	1,096	46	57	20	16	8
	2012	3,489	1,125	48	62	21	16	7
	2013	3,415	1,214	49	65	24	17	7
	2014	4,002	1,412	50	68	25	17	8
カンボジア	2010	8,245	773	73	105	20	22	24
	2011	8,779	717	73	110	19	22	23
	2012	9,291	951	73	99	19	23	23
	2013	9,390	927	73	97	18	19	23
	2014	9,324	550	79	104	18	20	25
ミャンマー	2010	32,580	1,376	234	585	1,016	381	1,620
	2011	29,010	1,485	254	619	1,079	412	1,684
	2012	26,217	1,502	260	620	1,080	421	1,626
	2013	26,372	1,601	262	742	1,265	382	2,335
	2014	26,423	1,693	280	834	1,389	392	2,561

資料：FAOSTAT

注1：牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

2：トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

3：過去にさかのぼって数値が変更される場合がある。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

ASEAN では、気候条件が酪農にあまり適さず、良質な飼料の自給が困難で、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではないことから、牛乳乳製品は、一般的な食材ではない。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、主に全粉乳などの粉乳類か、缶入り加糖れん乳であった。しかし、近年はコールドチェーンの発達や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳の需要も高まりつつある。

各国とも、脆弱（ぜいじゃく）な酪農生産基盤により牛乳乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、2.5億人の人口を有し、近年、経済発展を遂げているインドネシアについては、乳製品需要の伸びが最も期待されており、ベトナムなどとともに、外資系企業の参入も積極的に行われている。

一方で、ASEAN 各国では、乳製品の定義や統計上の取り扱いがあいまいであることから、乳製品需給動向の正確な把握は困難となっている。

① 生乳生産動向

2015年の乳用牛飼養頭数および生乳生産量は、乳製品需要の高まりを背景に主要5カ国全てにおいて増加した（表2）。

国別にみると、インドネシアは、乳用牛飼養頭数は、52万5000頭（前年比4.4%増）、生乳生産量は80万5000トン（同0.6%増）であった。乳用牛の大部分はジャカルタなどの大消費地に隣接するジャワ島の冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。繁殖牛の遺伝的能力が低く、零細な経営が多くを占めている。インドネシア政府は、牛肉の国内自給率を90%にするという目標のために、2012年から生体牛および牛肉の輸入規制等を行った結果、国内の牛肉需給が逼迫し、これを補うために、国内の乳用牛のと畜頭数が増加し、乳用牛が大幅に減少することとなった。2013年下期から、国内牛肉価格で輸入の可否を判断する基

準価格方式の導入などにより、輸入規制は緩和されたことで、2014年以降は、飼養頭数、生乳生産量ともに増加傾向にある。

マレーシアは、乳用牛飼養頭数は、3万4300頭（同2.1%増）であった。乳用牛の大半は半島部で飼養されている。飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラク州などである。同年の生乳生産量は、7万6000トン（同1.0%増）となっている。歴史的に油ヤシや天然ゴムのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤は限定的となっている。

フィリピンは、乳用牛飼養頭数は、2万2500頭（同4.1%増）となっており、そのほか、水牛が乳用として飼養されている。生乳生産量は2万トン（同3.6%増）となり、うち約6割が牛由来、残りの4割は水牛乳とヤギ乳とみられている。

タイは、乳用牛飼養頭数は、50万9500頭（同0.2%増）で、生乳生産量は108万4000トン（同1.6%増）となっている。飼養頭数は、2009年以降、学校給食用をはじめとする飲用乳需要の増加を反映し、増加傾向で推移している。

ベトナムは、乳用牛飼養頭数は、27万5300頭（同21.0%増）と大幅に増加した。乳用牛の約5割は、主要消費地となるホーチミン市近郊で飼養されている。2001年に政府が酪農振興計画を打ち出して以来、大手乳業企業による大規模酪農場の開設などを背景に、飼養頭数が大幅に増加している。生乳生産量は、頭数の増加を反映し、72万3000トン（同31.6%増）となっている。

表2 乳用牛飼養頭数と生乳生産動向 (2015年)

国名	飼養頭数	(単位:千頭,千トン)		
		前年比 (増減率)	生乳生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	525.0	4.4%	805	0.6%
マレーシア	34.3	2.1%	76	1.0%
フィリピン	22.5	4.1%	20	3.6%
タイ	509.5	0.2%	1,084	1.6%
ベトナム	275.3	21.0%	723	31.6%

資料：各国政府統計

注1：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

2：フィリピンの生乳生産量は水牛乳およびヤギ乳を含む。

② 牛乳乳製品の需給動向

主要5カ国では、牛乳乳製品の消費量に占める輸入量の割合（生乳換算）は一般的に高く、多くの国で過半を占めている（表3）。

2013年の牛乳乳製品の1人当たり消費量を国別にみると、インドネシアは、14.8キログラム（前年比2.9%増）となった。調製粉乳と加糖れん乳の消費が多く、牛乳の消費は少ない。

マレーシアは、32.4キログラム（同8.7%減）と、主要5カ国の中でも最も多い。同年の牛乳乳製品の輸出量は、48万5000トンとなっているが、ニュージーランドや豪州から輸入した粉乳を原料として、国内で調製品に加工して再輸出している。甘いものを好む習慣があることから、加糖れん乳が多く消費されており、牛乳はフレーバー付きの需要が高い。

フィリピンは、15.7キログラム（同3.2%増）となった。国内で流通する牛乳乳製品のほぼ全量が、ニュージーランド、米国、豪州などからの輸入乳製品および輸入品を原料とした加工品となっている。

タイは、29.4キログラム（同3.2%減）となったが、デンマーク政府の協力により設立されたタイ酪農振興機構や外資系企業による牛乳乳製品の生産拡大および学乳需要などにより、消費量は増加傾向で推移している。なお、同年の牛乳乳製品の輸出量は24万1000トンとなっている。これは、豪州などから輸入した脱脂粉乳などを原料として、還元乳やれん乳などへ加工の上、周辺国などに輸出しているものである。

ベトナムは、16.4キログラム（同3.6%減）となった。従来、同国では牛乳や乳製品の消費量は少なかったが、経済成長と政府の酪農振興策を背景に、近年、徐々に市民に受け入れられ、市場は拡大傾向にある。

表3 牛乳・乳製品の需給動向

国名	生産量 (2015年)	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	(単位:千トン,kg)	
					1人当たり 消費量(2013年)	
インドネシア	805	2,542	3,242	105	14.8	
マレーシア	76	1,768	1,360	485	32.4	
フィリピン	20	1,457	1,402	75	15.7	
タイ	1,084	1,275	2,118	241	29.4	
ベトナム	723	1,277	1,985	16	16.4	

資料：生産量は各国政府統計（2015年）、それ以外はFAOSTAT（2013年）

注1：消費量は、資料によって年が異なるが便宜上、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

2：マレーシアの1人当たり消費量は同国の政府統計（2013年）。

(2) 肉牛・牛肉産業

主要5カ国の牛肉需要を見ると、食習慣や経済発展の差が大きく、1人当たり消費量は、国ごとに大きな差があるが、各国とも横ばいで推移している

牛肉消費が伸びない要因は、牛肉が豚肉や鶏肉に比べて高価なことなどが挙げられる。

① 牛の生産動向

2015年の肉用牛飼養頭数を国別にみると、インドネシアは、生体牛輸入規制の緩和により、1549万4000頭（前年比5.2%増）と増加した（図2、表4）。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占めている。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して短期間肥育するフィードロット産業も盛んである。

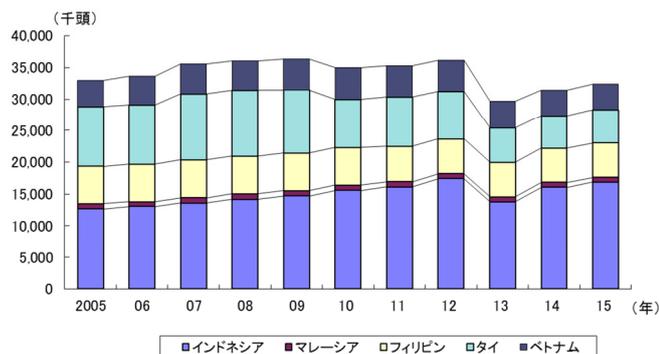
マレーシアは、62万7000頭（同0.4%減）である。主な品種は在来種とブラーマンなど外国種との交雑種となっている。プランテーションで下草を食べさせる粗放的な一貫経営が多くみられる他、フィードロットなどの集約的な経営を行っているところもある。

フィリピンは、253万4000頭（同0.9%増）となっている。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、飼養頭数20頭未満の小規模経営が全体の9割以上を占めている。

タイは、政府の肉牛振興政策などにより2001年以降微増傾向で推移しており、440万7000頭（同2.2%増）となった。

ベトナムは、156万7000頭（同1.9%増）となった。生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国や豪州から輸入して肥育を行う経営が一般的である。

図2 肉用牛・水牛飼養頭数の推移 (2015年)



資料：各国政府統計

表4 肉用牛・水牛飼養頭数と牛肉生産量 (2015年)

	飼養頭数		牛肉生産量 (水牛を含む)	前年比 (増減率)
	肉用牛	水牛		
インドネシア	15,494	1,381	556	4.3%
マレーシア	627	119	50	▲ 4.5%
フィリピン	2,534	2,855	409	1.1%
タイ	4,407	888	196	10.2%
ベトナム	1,567	2,524	385	1.7%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

② 牛肉の需給動向

2015年の主要5カ国の牛肉生産量(水牛肉を含む)は、インドネシアが55万6000トン(前年比4.3%増)、マレーシアは5万トン(同4.5%減)、フィリピンは40万9000トン(同1.1%増)、タイは19万6000トン(同10.2%増)、ベトナムは38万5000トン(同1.7%増)となった(表4、図3)。

2013年の牛肉(水牛肉を含む)の1人当たり年間消費量を国別にみると、インドネシアは、2.6キログラム(同8.8%増)となっている(表5)。牛肉の消費習慣は、民族・宗教によって異なり、消費地域はジャワ島など一部地域に集中している。

マレーシアは、6.7キログラム(同9.6%増)となった。輸入量は、消費量とほぼ同じ割合で増加しており、消費の伸びを支えている。牛肉自給率は2割程度で、輸入牛肉の割合が大きくなっている。主な輸入先国はインド、豪州である。

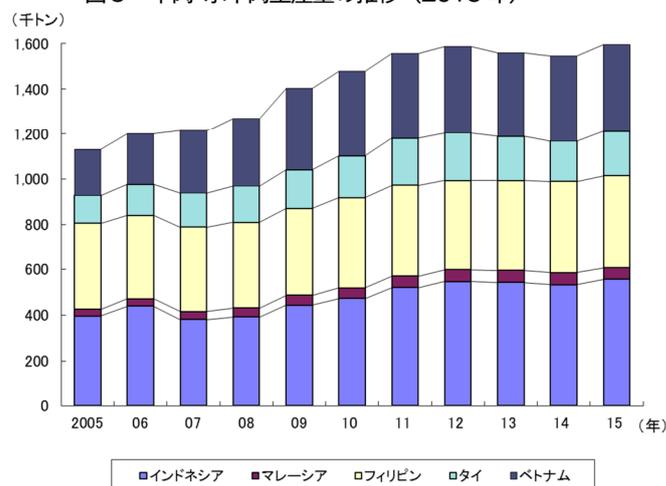
フィリピンは、4.1キログラム(同4.2%減)であった。牛肉自給率は8割程度であり、主な輸入先国は、インド、ブラジル、豪州である。このうち、インドからの安価な水牛肉は、コンビーフに加工されるなどし

て食されている。

タイは、2.6キログラム(同7.9%減)となった。牛肉輸入量は、3万3000トンと主要5カ国中で一番少なくなっている。

ベトナムは、7.4キログラム(同0.5%減)であった。牛肉自給率は5割程度であり、主な輸入先国は、豪州、ニュージーランド、インド、米国である。

図3 牛肉・水牛肉生産量の推移 (2015年)



資料：各国政府統計

表5 牛肉の需給動向

国名	生産量 (2015年)	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	1人当たり消費量(2013年)	
					消費量	消費量
インドネシア	556	61	617	0	2.6	2.6
マレーシア	50	182	226	7	6.7	6.7
フィリピン	409	101	509	1	4.1	4.1
タイ	196	33	178	50	2.6	2.6
ベトナム	385	534	919	0	7.4	7.4

資料：生産量は各国政府統計(2015年)、それ以外はFAOSTAT(2013年)

注1：水牛肉を含む。

2：国内消費量は、資料によって年が異なるが便宜上、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

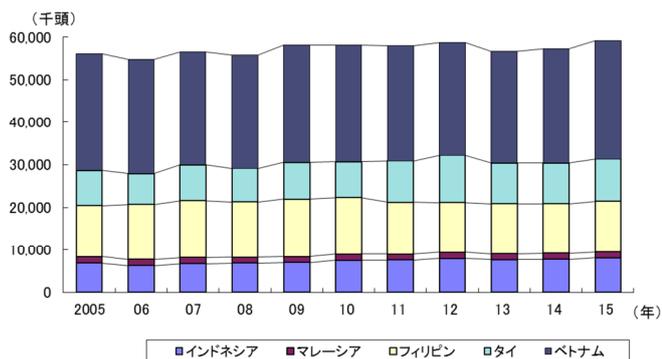
3：マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。

4：マレーシアの1人当たり消費量は同国の政府統計(2013年)。

(3) 養豚・豚肉産業

ASEAN諸国は、インドネシア、マレーシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒の人口も多く、国によって豚肉の消費量には大きな格差があり、豚肉の政策上の位置付けもさまざまである。他方、イスラム教徒が多数を占める国でも、中国系住民などの豚肉需要はあり、飼養規模、地域など限定的ではあるものの、養豚業は存在している(図4)。

図4 豚飼養頭数の推移 (2015年)



資料：各国政府統計

① 豚の生産動向

主要5カ国は、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群 (PRRS)などの家畜疾病が継続的に発生しているため、家畜衛生対策が課題である。

2015年の豚飼養頭数は、インドネシアおよびマレーシアでは、イスラム教徒の人口が多いこともあり、それぞれ804万4000頭(同4.5%増)、141万4000頭(同0.8%減)となっている(図4、表6)。両国の飼養頭数の差は、非イスラム教徒がインドネシアは約3800万人であるのに対し、マレーシアは約1200万人と、非イスラムの消費者人口によるものである。

フィリピンは宗教的な制約が少ないことから、主要5カ国の中でベトナムに次いで飼養頭数が多い。近年は、2009年をピークに減少傾向で推移していたが、2015年は1200万頭(同1.7%増)となった。

タイの豚飼養頭数は、価格変動や疾病などの影響により増減を繰り返しており、2015年は988万7000頭(同4.0%増)となった。

ベトナムの豚飼養頭数は、国内の豚肉需要の拡大を受けて2000~2005年にかけて増加し、その後は、家畜疾病の発生や飼料価格の高騰、出荷価格の低迷などがあり、おおむね横ばいで推移した。直近では、2014年以降、緩やかな増加傾向にあり、2015年は過去最高となる2775万1000頭(同3.7%増)となった。

表6 豚飼養頭数と豚肉生産量 (2015年)

(単位:千頭、千トン)

国名	飼養頭数	生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	8,044	319	5.6%
マレーシア	1,414	223	2.3%
フィリピン	12,000	2,120	4.3%
タイ	9,887	1,064	3.7%
ベトナム	27,751	3,492	4.2%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。

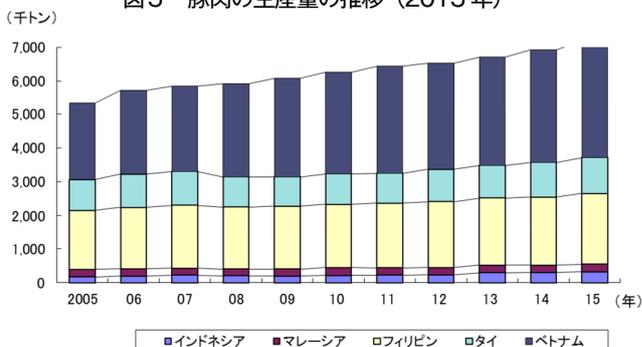
② 豚肉の需給動向

主要5カ国の豚肉生産量は、全体的に増加傾向で推移しており、2015年は、インドネシアが31万9000トン(同5.6%増)、マレーシアは22万3000トン(同2.3%増)、フィリピンは212万トン(同4.3%増)、タイは106万4000トン(同3.7%増)、ベトナムは349万2000トン(同4.2%増)となった(図5、表7)。

豚肉消費は、宗教の影響を強く受けており、2013年の1人当たり豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアで3.0キログラムであったのに対し、食肉に関する宗教的制約の少ないベトナムで35.0キログラム、フィリピンで18.4キログラム、タイで13.0キログラムとなっており、国による差が大きくなっている(表7)。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民(非イスラム教徒)などが人口の4割程度を占めていることから、国全体では7.5キログラムであるが、非イスラム教徒に限ると同18.7キログラムとなっている。

図5 豚肉の生産量の推移 (2015年)



資料：各国政府統計

表7 豚肉の需給動向

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり
	(2015年)	(2013年)		(2013年)	消費量(2013年)
インドネシア	319	2	321	1	3.0
マレーシア	223	16	230	9	7.5*(18.7)
フィリピン	2,120	108	2,225	3	18.4
タイ	1,064	1	1,047	19	13.0
ベトナム	3,492	0	3,491	1	35.0

資料：生産量は各国政府統計（2015年）、それ以外はFAOSTAT（2013年）

注1：国内消費量は、資料によって年が異なるが便宜上、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

3：マレーシアの（）内は非イスラム教徒のデータ。

4：マレーシアの1人当たり消費量は同国の統計（2013年）。

（4）養鶏・鶏肉産業

① 鶏の生産動向

ASEAN 諸国では、肉用鶏や採卵鶏の飼養が盛んであり、在来鶏やブロイラーの他、アヒルなどの家きんも飼養されている。

インドネシアは、鶏の飼養羽数が主要5カ国中最も多い。肉用鶏の飼養羽数は、南スラウェシ州などで発生した鳥インフルエンザの影響を受け、2010年に減少したが、その後順調に回復し、2015年は14億9763万羽（前年比3.8%増）、鶏肉生産量は162万7000トン（同5.4%増）となった（図6、表8）。同年の採卵鶏の飼養羽数は、1億5142万羽（同3.2%増）、鶏卵生産量は129万トン（同3.6%増）となった。肉用鶏の飼養羽数に比較して鶏肉生産量が小さな値となっているのは、コールドチェーンが未発達なことなどにより、食鳥処理場以外の場所で処理したり、生きたまま販売したりするケースが多数を占め、統計上全体の生産量が把握できないためと考えられる。

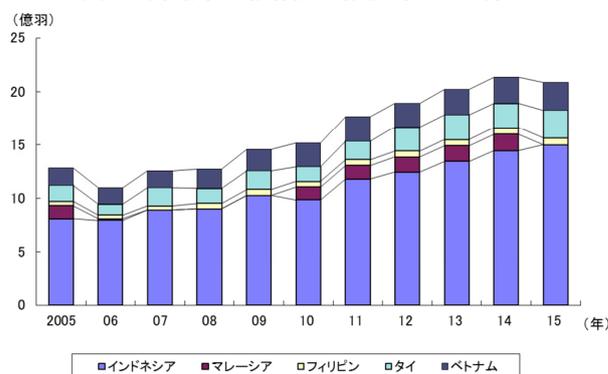
マレーシアの肉用鶏の飼養羽数は、2005年の鳥インフルエンザの発生により減少がみられたものの、徐々に回復し、2014年には1億5630万羽（同7.7%増、15年は未公表）、2015年の鶏肉生産量は161万4000トン（同2.6%増）となった。2014年の採卵鶏の飼養羽数は、5564万羽（前年同、15年は未公表）、2015年の鶏卵生産量は、77万5000トン（同6.5%増）となった。

フィリピンの2015年の肉用鶏の飼養羽数は、6662万羽（同8.2%増）、鶏肉生産量は166万1000トン（同5.7%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は3125

万羽（同4.2%増）、鶏卵生産量は44万5000トン（同7.0%増）となった。

タイは、鳥インフルエンザが発生した2004年以降、EUや日本向けの生鮮鶏肉の輸出が停止していたが、EU向けは2012年7月、日本向けは2013年12月、韓国向けは2016年11月に解禁した。2015年の肉用鶏の飼養羽数は、2億6143万羽（同11.4%増）となった。採卵鶏の飼養羽数は、2015年は5704万羽（同7.7%増）となった。また、同年の生産量は、鶏肉が179万7000トン（同8.4%増）、鶏卵が72万トン（同5.8%増）となった。

図6 肉用鶏の飼養羽数の推移（2015年）



資料：各国政府統計

注：2015年のマレーシアの数値は未公表。

表8 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量

国名	飼養羽数		生産量			
	肉用鶏	採卵鶏	鶏肉	前年比 (増減率)	鶏卵	前年比 (増減率)
インドネシア	1,497,626	151,419	1,627	5.4%	1,290	3.6%
マレーシア	156,298	55,636	1,614	2.6%	775	6.5%
フィリピン	66,617	31,254	1,661	5.7%	445	7.0%
タイ	261,431	57,035	1,797	8.4%	719	5.8%
ベトナム	259,295	-	908	3.8%	516	6.5%

資料：各国政府統計

注1：鶏卵は1個58グラムで換算。

2：マレーシアの飼養羽数は2014年、それ以外は2015年。

② 鶏肉の需給動向

鶏肉は宗教上の制約が少ないことから、主要5カ国では最も身近で重要な動物タンパク源となっており、経済成長に伴う消費の伸びを受け、生産量は増加傾向で推移している（図7、表9）。需要の増加を背景に、外資による食鳥処理場の整備や大手ファストフードの参入などが増加している。

2013年の各国の1人当たりの鶏肉消費量をみると、マレーシアは、50.7キログラムとなった。同国は、イスラム教を信仰するマレー系などが人口の過半を占め

ていることから、宗教的な制約が少ない鶏肉が多く消費されている。

タイは、13.7キログラムとなった。同国は鶏肉の輸出に注力しており、輸出の伸びを背景に鶏肉生産量も増加傾向にある。近年は、国内消費も伸びており、国内消費が約7割、輸出が約3割となっている。

図7 肉用鶏生産量の推移 (2015年)

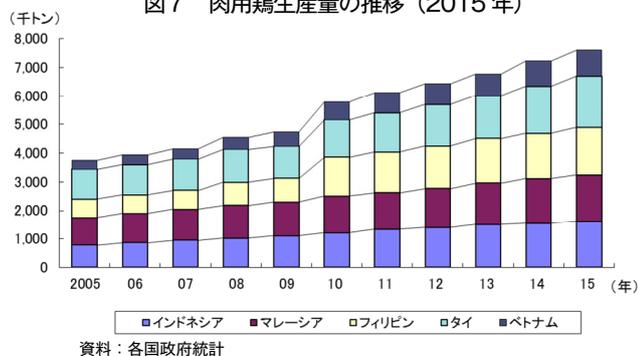


表9 肉用鶏の需給の推移

(単位:千トン, kg)

国名	生産量 (2015年)	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	1人当たり消費量(2013年)
インドネシア	1,627	1	1,628	0	7.5
マレーシア	1,614	48	1,630	32	50.7
フィリピン	1,661	99	1,753	7	11.9
タイ	1,797	11	1,074	734	13.7
ベトナム	908	115	1,023	0	12.4

資料：生産量は各国政府統計（2015年）、それ以外はFAOSTAT（2013年）

注1：国内消費量は、資料によって年が異なるが便宜上、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

3：マレーシアの1人当たり消費量は同国の政府統計（2013年）。

③ 鶏卵の需給動向

東南アジア諸国は、鶏卵価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定機能が十分に働かないことから、頻繁に供給過剰問題を抱えることとなる。

1人当たり鶏卵消費量は、インドネシアが4.9キログラム、マレーシアが22.4キログラム、フィリピンが4.0キログラム、タイが12.4キログラム、ベトナムが3.8キログラムと、国によって大きな開きがある(表10)。

表10 鶏卵の需給動向

(千トン, kg)

国名	生産量 (2015年)	輸入量 (2013年)	消費量	輸出量 (2013年)	1人1年当たり消費量(2013年)
インドネシア	1,290	0	1,290	0	4.9
マレーシア	775	0	680	95	22.4
フィリピン	445	0	445	0	4.0
タイ	719	0	699	21	12.4
ベトナム	516	0	515	2	3.8

資料：生産量は各国政府統計（2015年）、それ以外はFAOSTAT（2013年）

注1：鶏卵は1個58グラムで換算。

2：国内消費量は、資料によって年が異なるが便宜上、

「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。